

空



2010・6

**SORA** 31号

桜鯛

柴田 佐知子

山菜を濃く煮て春の祭かな  
桜鯛鱗飛ばしてややくすむ  
破られし約束混じる花吹雪  
枢鎖す釘に選ばれ油まじ  
霊枢車桜映して動きだす  
桜より押し出されたる霊枢車  
墓穴は人待つばかり蒙古風  
地震の傷ゆつくり癒えて山桜

拭き上げて祇園のさくらさくらかな

都をどり大路の色をあつめけり

夕暮の道ばかりなり糸桜

太宰府

その裾は紫雲英田となる水城跡

梅林を抜けて草餅まだぬくし

蝶のあと誰とも会はず戒壇院

まくなぎを仏陀の方へ払ひけり

都府楼跡

うつむきて憶良が歩む霞かな

青々と雨脚揃ふ旧端午

耳遠き父へ母へと新茶くむ

## 夏 草

高  
倉  
和  
子

春の夢泣き通す恋置いてきし  
桜貝ひとつ拾ひて別れけり  
大空に鳥の賑はひ旧端午  
半ばより父も加はり粽まく  
大いなる喪の闇があり椎の花  
夏潮の香りしてゐる砂袋  
葉桜や母には長き昔とも  
夏草の中を一直線の風  
緑立つ山に大きな仏さま  
涼しさや振り向く故郷あることも



# パリー祭

僧の子のしづかな立居著莪の花  
仏に侍すかくも涼しく黒を着て  
堂守の病みて久しや夏落葉  
百合の束見て抱へたる人を見る  
鳶の輪に薄暑の首を廻しけり  
蝸牛五寸歩めりバスの来る  
豆腐屋の過ぎ夕焼の井戸束子  
可愛ゆしと見てゐし小蟻つぶしけり  
蛇過ぎし岩がしばらく眼の中に  
パリー祭街角ばかり描きし画家

中田みなみ



## 踏切の先

荒井千佐代

粉こねる指にも腹や桜東風

蠅生まる医書と聖書のはざまにて

日に三度茶碗洗つて桐の花

百千鳥ミサオルガンの蓋閉ぢて

一八にきれいな声で話しかく

青蔦のひろがり登る文学館

枇杷熟るるけふも夕日は海に落ち

踏切の先は黄泉なり時鳥

早苗饗の高脚膳と畦に会ふ

木に見棄てられし実梅の落ちにけり



## 御開帳

春宵やちどりがかりに裾上げむ

穴道湖の蜩や砂の美しく

音たてて鱗そがるる桜鯛

正面に霞める富士か病みし眼に

開帳や東に向いて寅薬師

乗り出して秘仏拝さむ御開帳

秘仏より糸つながれりあたたかし

秘仏見てなだるごとく花は葉に

蝌蚪ぬけしあとの紐かと思ひけり

二十余年の職を辞して

二十年前も大樹や槻若葉

服部早苗



## 花みかん

柴田志津子

釣り上げて島より高き桜鯛

楷の木のかたち崩さぬ芽立ちかな

ゆく雁や特攻基地を碑に残し

みんな居てみんな仲良し春の夢

春の雲しばらく映す道路鏡

ミサイルの射程圏内枇杷をもぐ

玄海や横一線に烏賊釣火

花みかん出合ひがしらに牛の貌

## 水中花

小林朱夏

少年が怒つたやうに髪洗ふ

一輪の牡丹に顔の隠れたる

夢見るは罪とはならず水中花

道楽の過ぎたる僧のうすごろも

大輪のあぢさゐ雨に倒さるる

廁まで母をさがす子百日紅

灯りたる簾の中の夕餉かな

嘶家のやうに水飯流し込む



## 春の夢

矢野百合子

## 蟬の殻

秋 千晴

手を上げし位置がバス停島うらら

春コート手に持つことの多かりし

集ひしは世話役ばかり春祭

乳呑児は乳房に埋もれ春の昼

あまりにも佳き名に橋のかげろへり

たんぽぽや犬が掃除の邪魔をする

木の洞に観音在す花の寺

ももいろの風呂敷ほどく花筵

眠さうな子猫出て来る出湯坂

蟬の殻命半分あるやうな

選ばれて困つてしまふ春の夢

とろ箱に同じ顔して鮎並ぶ

春嵐目鼻剥きたる鬼瓦

解体のどさりと蛇の落ちてきし

花は葉になりて山裾広がれり

土堀より産まれしやうに守宮来る

# 空作品評

柴田佐知子

一八にきれいな声で話しかく 荒井千佐代

「鳶尾草（いちほつ）」とも書くアヤメ科の多年草「二八」は杜若や花菖蒲などにさきがけ、「いち早く咲く」ことに由来する名だという。防風や防火の効があるという俗信から藁屋根に植えられていたそうだ。美しい花だが、どこかひっそりとした風情もある。「きれいな声で話しかく」は、その一八の風情を彷彿する情感がある。

死すれば蝶秘すれば花と存へて 宮井 知英

「秘すれば花」は能作者である世阿弥の芸論『風姿花伝』の言葉である。上五中七の能の美を思わせるような言葉の運びが見事。つづく下五の「存へて」との措辞は、この世に引き寄せつつも幽冥の境へといざなう心憎いまでの技量である。

野火走り翼竜生まれ出でんとす 古川 夏子

翼竜は白亜紀ころまで生息していた空を飛ぶ爬虫

類の総称である。獯猛なティラノサウルスなどの恐竜の上を飛び交っていたであろう。原初の力を思わせる野火を異次元より捉え面白い。「翼竜生まれ出でんとす」という断定がダイナミック。

恐竜は草食といふ青き踏む 山田 正子

こちらは大型の草食恐竜。青々と萌え出でる草によつて引き出された思いであるうが、どこか飄々とした味わいがある。

ミサイルの射程圏内枇杷をもぐ 柴田志津子

一瞬にして多くの命が奪われた原爆投下なども想起させられた。平穏な日常がいかに危ういものの上にあることか。「枇杷をもぐ」がいい。

スペースシャトル帰還して竜天に 大地 真理

新しい素材を詠み込んでも、こちらはおおらかで屈託がない。スペースシャトル帰還の下降線と「竜天に登る」という上昇線を敢えて強調した作品。（以下略）

# 空集

## 柴田佐知子選

桜散る白紙に戻す話にも

淡雪や別れ話は手短に

黄塵や海の底ひの国境

初ざくら大工道具の黒光り

ごきぶりが乗用車より降りてきし

まだ象に揺られてゐたる昼寝覚

目をむいて餌を引きずる蟻もをり

蛇の衣道を塞いで揺れてをり

河鹿鳴く間仕切はづし雑魚寝かな

とりあへず土用鰻をかうてきし

赤き実と青き実を食べ鳥雲に

走り根の絡み合ふなり木の芽山

正宗の刃紋に鷹はじまりぬ

夕長し鴟尾の対なす西東



さざ波の端の重なり鶴帰る

死すれば蝶秘すれば花と存へて

入院の決まりし父と桜見る

春の夢消えゆく父の手が温し

糸田 宮井知英

長崎 鳳 蛮華

粕屋 秋 千晴